

海月の死骸と烏賊の骨

佐伯実琴

ここに

生の傷口があり

それを

白い包帯で巻く

ことができたなら

取り替えたばかりの

新しさに見惚れて

手を取り合って

あたためて

「そのリボン綺麗だね」とくすくす笑い合うことができたのでしょうか

いまでも

海月の

死骸と

烏賊の

骨

があるのか

確かめようとして

あの秘密の

垣根の中へ

共に潜り込む

ことができたなら

あなたを呼ぶ声からすべてを隠してしまえたのでしょうか

海岸で見つけた

大きな石の上に

躑躅の花を並べて

どれがいちばん綺麗か決める品評会を開きましょう

それで一等賞を与えたものをあなたの髪に挿して

二等賞をもらうことにするのです

——ええ

それでも、あなたは急いでここを出て行くのですた

何かを求めて

だから、ただ情けなくのろまな足で追いかけるのですた

何かを願って

大勢の船虫が

浜への侵入者を知らせるように

方々へ散っていき

富士壺の山ほど付いた崖が

軟弱な手足を傷つけます

背丈の倍以上あるそれを

ようやく越えても

まだ岩肌は続くようでした

あなたの名前を呼んでみましたが

大きいだけの波音が掻き消してきて

気づけば腰のあたりまで

水飛沫が飛んできて

遠くの灯台にかかっている

雷を伴う黒い雨雲は

ひどく怒っているように見えるのでした

辺りには海鳴りだけが響いていました
強い向かい風が傷んだ髪先を撫でてゆき
磯の匂いを含ませました

思わず押さえつけた指先に
髪の毛の一本一本が食い込むような
鋭敏な感覚がありました

後ろを振りかえると
さつき歩いてきたはずの砂浜に潮が満ち
あちこちで白波が立っており
遠くの街灯が点いたり消えたりしていました

それで
瞼を
開けるのも
閉じるのも
やけに苦しいことに気づいて
一秒ごとに長い瞬きをしました

それは
精一杯
人間の振りをしているかのようにでした

震えるような冷や汗に
渦を巻くような目眩がしました

夏のような

冬のような

春のような何かこの季節、に

あの日言いかけた

言葉が

時間とともに消えていくことはありませんでした

沖に浮かぶ魚影のように黒々と存在しつづけています

——ええ

この海はいつも

曇り空の下にあるのでした

飽きもせず

繰り返し繰り返し

また

灰色の中に……